

10 古墳を地域資源化する―湯舟坂 2 号墳プロジェクトの挑戦―

諫早直人

1. はじめに

京丹後市久美浜町須田に湯舟坂 2 号墳という古墳がある。直径 17.5m の小さな古墳だが、1981 年、圃場整備事業に先立つ発掘調査で横穴式石室の中から双龍環頭大刀や銅鏡、馬具、須恵器など多彩な遺物が出土した、丹後半島を代表する後期古墳である。発掘終了後、古墳は京都府の史跡、出土品は国の重要文化財に指定され、文化財保護法のもとで恒久的な保存措置がはかられてきた。一方で、出土品は報告のための整理作業や保存処理のために地元を離れた後、京都府立丹後郷土資料館に寄託され、普段はなかなか目にすることが難しい。地元の人もめったに目にする機会のない「宝物」となってしまった。もちろん現地にいけばいつでも巨大な石室をみることはできるが、実際に発掘を目にした人でもない限り、発掘当時の興奮を感じることは困難である。当時としては最高水準の調査のもとに記録され、現在も法律のもとで適切に保護されてはいるものの、時の流れとともに記憶が風化していく中、湯舟坂 2 号墳はこれからも地元の人に愛される、地域の誇りとなる文化遺産であり続けることができるだろうか。これは湯舟坂 2 号墳だけでなく、全国各地の古墳や遺跡に共通する課題でもある。

京都府立大学文学部考古学研究室では令和 2 年度 ACTR「丹後半島における文化遺産の地域資源化に関する総合的研究」（研究代表：諫早直人）に採択されたことを契機として、京丹後市教育委員会・京都府立丹後郷土資料館と共同で、湯舟坂 2 号墳の学術的価値を再評価し、地域資源として今後活用していくための基礎資料の掘り起こしに着手したところである。1983 年の発掘調査報告書刊行後の古墳時代研究の蓄積を踏まえて湯舟坂 2 号墳やその出土品を再評価するとともに、石室や出土品の再撮影や三次元計測をおこない、湯舟坂 2 号墳を「地域資源」として今後、積極的に活用していくためのコンテンツの確保に努めている。ここでは今年度の取り組みの概要を紹介する。

2. 湯舟坂 2 号墳プロジェクトの概要

（1）湯舟坂 2 号墳出土品の調査

国の重要文化財に指定を受けている出土品の再調査にあたって最大のネックとなったのは、窒素封入ケースにおさめられた双龍環頭大刀であった。所蔵機関である京丹後市教育委員会、保管機関である京都府立丹後郷土資料館と協議をおこない、事前に開封から再密封までのスケジュールを調整し、2020 年 9 月 1 ～ 16 日の期間にすべての調査をおこなった。約 20 年ぶりとなる開封、点検・調査・撮影、再密封作業にあたっては、湯舟坂 2 号墳出土品の最初の保存処理にも携わった元興寺文化財研究所の協力を得た。これによって奈良文化財研究所の栗山雅夫氏による、最新のデジタル撮影機材を用いた出土品の全面的な再撮影を実施することが可

能となった。再撮影は高倍率写真や集合写真を中心に、湯舟坂2号墳出土品の学術的意義をビジュアルに伝えられるよう企図した（本書表紙写真、写真1）。また双龍環頭大刀など一部出土品については、三次元計測、蛍光X線分析やマイクロスコープなどを用いた科学的調査や、再実測などの考古学的調査をあわせて実施している。コロナ禍で様々な制約があったものの、これらの調査には学生も参加しており、最先端の文化財調査に触れる貴重な機会となった。

（2）湯舟坂2号墳および須田平野古墳の現地調査

2020年10月19日に相互技研の協力のもと、現地に保存されている横穴式石室の写真三次元計測をおこなった。また10月21日には栗山雅夫氏のもと、古墳、石室の再撮影を実施した。これらの作業と並行して、この地域で湯舟坂2号墳に先行する大型横穴式石室墳として知られる須田平野古墳についても、石室の撮影と学生による写真三次元計測をおこなった。

（3）地域資源化に向けて

1981年におこなわれた発掘調査の現地説明会は、参加者2～3,000人という空前絶後の規模となるなど、湯舟坂2号墳の発掘調査は地元へ大きなインパクトを与えた。現在、京丹後市教育委員会文化財保護課を中心に調査当時の記憶・記録の掘り起こしと、これまで地元で進められてきた取り組みについて調査を進めている。また、上述の調査で得られた成果の活用をもとに、2021年1月23・24日に京丹後市教育委員会と京丹後市久美浜町須田区との共催による成果報告会と地元住民との座談会を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の再拡大を受けて残念ながら延期となった。京都府立丹後郷土資料館や京丹後市立丹後古代の里資料館では2021年度中に湯舟坂2号墳発掘40周年を記念する企画展、特別展が計画されており、今回得られた調査成果はそれらの展示において積極的に活用していく予定である。

3. おわりに

以上が現在進行中の湯舟坂2号墳プロジェクトの概要である。大学が磁場となって、教員・学生のみならず学外の様々な研究者の協力を得ることによって、行政と地元だけでは予算的にも人的にも難しい再調査を実施し、活用の前提となる基礎資料を40年ぶりに更新できたことは重要である。しばらく続くであろうコロナ禍とどう向き合っていくかという難問はあるものの、大学・行政・民間（地元）が一体となって、地域の古墳を地域資源化していくためのレシピを、実践の中からつくりあげていきたい。



写真1 湯舟坂2号墳出土品集合（栗山雅夫氏撮影）